2007.2.4

静かなる逃亡～ アルヴォ・ペルト「FRATRES」　(12Vc)

逃亡することがいとも容易いように用意されている。しかも、それを容認しながら、実際の逃亡者に対しては競争原理によって抑圧を加える。それが現代だ。
麻薬を提供し、それに食いつく人間から搾り取るだけ搾り取る。しかも始末の悪いことに、我々はそれが麻薬だと気付かない。それが現代なのだ。

気違いじみた競争に血眼になることが、現代の閉塞的な状況を打ち破り、かつての経済的な繁栄を取り戻す唯一の方法だ、と叫ぶだけの社会。そのような社会であっても、環境破壊や、凶悪犯罪やイジメの増加などを防ぐことが可能だ、と平気で信じている社会。一体誰がこんな社会へと牽引してきたのだろう。
人工知能さえあれば、単純作業から完全に解放され、人間はより高度な作業のみを行うことができ、ひいては経済、文化、科学技術の永遠の発展が約束される、と平気で信じ、我々自身が退化の一途をたどっていることに気付いていない社会。かつて、夢を追い求めることを「働く」と称していた団塊の世代たちが、それらに異議を唱えないばかりか、呆れたことに、自ら溜め込んだ貯金をどうやって使おうか、とそればかり考えている。

誰もが何のために働いているのか分からぬままに、ただ、いかに消費させ、麻薬をかがせ、金を引き出させるか、という一点にのみ終始する。
安い労働力を求めて海外に進出し、その次に、それらの労働者たちが得た賃金を目当てに、新しい文化を「買わせ」る。
彼らは決して楽をして金を儲けようとしているわけではない。ただ、自分たちが何をやっているのかについて無知なだけなのである。

若者たちの幻滅感の背景にあるのは、そういった時代の空気だ。

若者たちが部屋にこもり、あるいはネットカフェを転々として、生命をつなぐ最低限の生活をしているのは、「働く」ことに魅力が無いからだけではない。
逃亡するための麻薬を用意し、しかも、それを搾取に利用しているコマーシャリズムが存在するためなのだ。我々は、なぜそれを許しているのか。我々はそれを拒否すべきだ。

その「麻薬」とは、乱立するエンターテインメント産業であり、我々をバーチャルな世界に閉じ込めるディジタルシステムである。
その二つは、「働く」という行為と、「遊ぶ」という行為をダブらせてしまい、自分が一体何をしているのかを見えなくしてしまう。ちょっとでもよろめいたが最後、我々は呑

み込まれ、現実の世界へ戻れぬまでに無感覚にされてしまう。

静かなる逃亡が進行し、拡散し、この国を覆いつくそうとしている。まるでこの音楽のように、着実に。

我々は何を作るべきか、そして何を手に入れるべきか――― 改めてこの二つを考え直す必要がある。